

生を明め、死を明むる

～恩師からのメッセージ～

加茂法話会 平成三十年正月二十四日

一、生を明らめ死を明らむるは佛家一大事の因縁なり、生死の中に佛あれば生死なし、但生死即ち涅槃と心得て、生死として厭うべきもく、涅槃として欣うべきもなし、是時初めて生死を離るる分あり、唯一大事因縁と究盡すべし。

この娑婆は生老病死の四苦の世界であると明確に知ることが仏道修行者にとって最も大切な手がかりである。この世に於ける覚者、即ち仏には生老病死は単なる苦しみではない。但生老病死の娑婆にあつてこそ涅槃の境地が得られたのであるから、四苦に満ちた世界と厭うべきものでもなく、かといってここが涅槃の世界であると欣び憧れることもない。この理を知った時はじめて四苦を解脱する境地が開けるのである。(生死を明らめることが) 証りを得るに最も大切なものとよく究めるがよい。

二、昨年十二月二十八日、布教の師と仰ぐ福島県興國寺住職・辻淳彦老師が世壽八十二歳で遷化。



法話中の辻老師



正月 8 日～9 日、密葬

三、辻淳彦老師に、頂いた年賀状から
あたらしき年のはじめは楽しかり わがたましひを養ひゆかむ

平成十四年

去年 こぞ 今年 ことし 貫く棒の如きもの

高浜虚子

歡喜と栄光に輝いた日も、悲哀と屈辱に泣いた日も、もう二度と還ってくることは有りまん。ただ今日一日だけが、新しい「いのち」なのです。さあ、この「いのち」を精一杯に生かしましょう。

平成二十六年

われという 小さきものを あめつち 天地の 中に生みける 不思議おもふ

柳原白蓮

悠久の時の流れから見れば、我々の命も、一瞬。

浮かんですぐ消える泡影のようなものかも知れません。

しかし、私たちに与えられた「いのち」ほど尊いものは有りません。あなたにとつても、私にとつても……。

お互いの「いのち」を大切に生きる年と致しましょう。

平成二十七年

四、この生死は、すなはち仏の御いのちなり。これをいとひすてんとすれば、すなはち仏の御いのちをうしなはんとするなり。

正法眼蔵 生死の巻

五、生きとげる 死にきる、これが覚者の教えである

永平寺七十四世佐藤泰舜禪師

東龍寺住職 渡邊宣昭 合掌